

Future

2013.January Vol. 58

2013年1月4日発行 八事日赤ニュース 58号

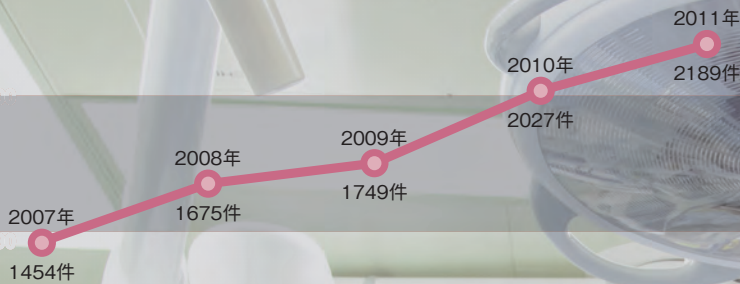
- 発行責任者/院長 石川 清
- 編集/名古屋第二赤十字病院企画課
名古屋市昭和区妙見町2番地の9
- 編集協力/HIP コーポレーション



名古屋第二赤十字病院

日本赤十字社

名古屋第二赤十字病院 院内がん登録件数



地域で 取り組む がん治療

特集ページ

情報ページ

Special Report

がん診療の質と安心を保証できる
「地域チーム医療」の
実現をめざして。

八事日赤を知ろう!
東海地震発生を想定した
災害訓練を実施しました。

病気を知ろう!
冬におきやすい
皮膚の疾患
平成25年に向けて
新年のご挨拶

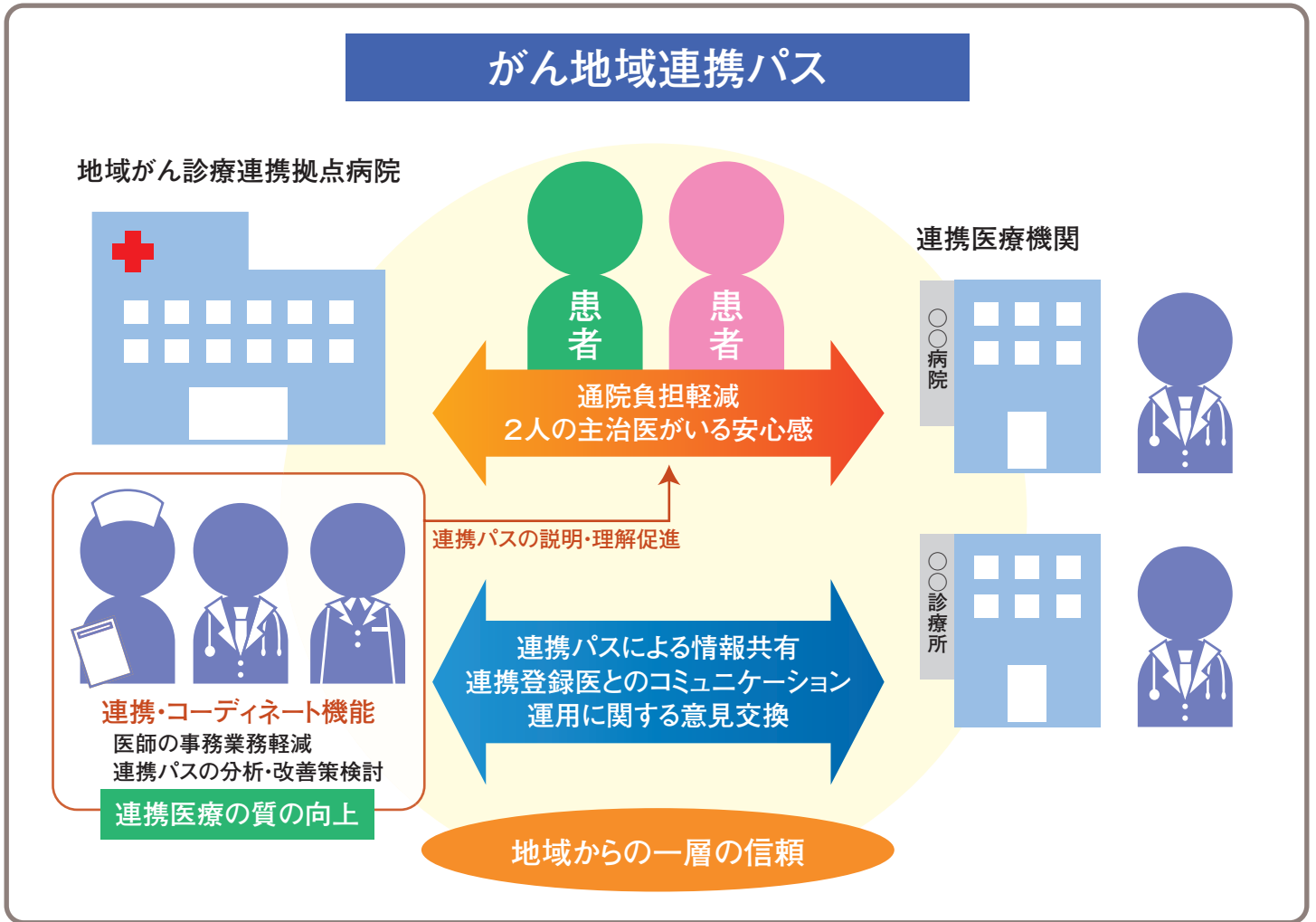
Message

院長メッセージ

これからの地域医療は機能分化と医療連携が重視され、当院は高度急性期医療を担い、他の病院、診療所、施設と医療連携のなかで当院の役割を果たしていくことになります。地域の医療は地域の医療施設全体で守るといふ考えで、地域の医療資源を有効に活用し、地域の皆さまの健康を守っていききたいと思います。

Special Report

がん診療の質と安心を保証できる 「地域チーム医療」の 実現をめざして。



連携先の医療機関が抱える不安を軽減することで地域の信頼を獲得。

日本では現在、厚生労働省が策定した「がん対策推進基本計画」に則り、がん診療における地域連携が推進されている。都道府県ごとに「がん地域連携パス」を作成し、がん診療連携拠点病院が中心となって地域ぐるみでがんの診療にあたるシステムを作り上げるといったものだ。

「がん地域連携パス」とは、手術を行うがん診療連携拠点病院と、日々の診療と薬の処方を行う患者のかりつけ医とが連携し、継続的に標準治療を続けていくための治療計画を記した冊子のことである。



がん地域連携パスを他の医療機関に先駆けていち早く導入。

がん診療連携拠点病院である名古屋第二赤十字病院では、愛知県の医療機関のなかでもいち早く「がん地域連携パス」の運用を開始。一般消化器外科副部長の法水信治医師が中心となり、3年半



5大がんのすべてで がん地域連携パスを運用。 医療機関ごとの分業化を進め 地域でがん治療に取り組む。

前から胃がんと大腸がんにおける「がん地域連携パス」の運用を進めてきた。

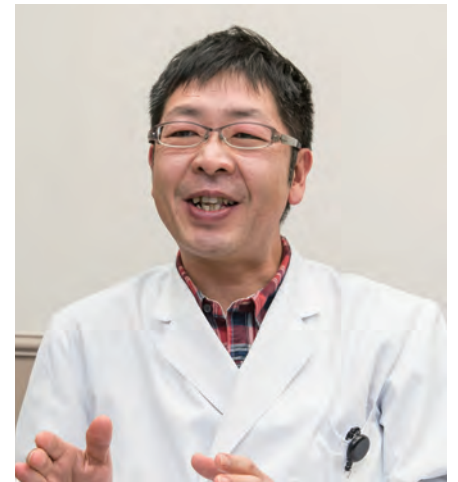
その背景はがん患者の急増にある。10年前と比べてがんの手術件数は50%ほど増えているのだ。「今後も手術件数の増加が予想されるなかで、術後の容態が安定した以降も、継続的に経過観察を行うためには、地域の医療機関との役割分担が不可欠です。こうした連携を担う重要なツールが『がん地域連携パス』なのです」と法水医師は話す。

ただ、運用当初は、地域の医療機関からの理解を得るのに苦しんだという。「抗がん剤の副作用や急変が生じた場合にどう対処すればいいかなど、連携先である医療機関の先生方も不安を抱えていました。そのため、24時間365日、何かあれば当院が責任を持って対処に当たることを確約し、先生方の不安を軽減することで地域の信頼を得ることができました」。

運用件数が伸び悩み 連携パスの普及を促すため 新たなシステムを構築。

目下の課題は、運用件数の伸び悩みをいかに解消するかだ。導入開始から3年間で連携できた患者数はおよそ60人。同院外科医一人あたり5名ほどの計算だ。「この数では連携がうまく進んでいるとは言えない」と法水医師も吐露する。

問題は二つある。一つは外科医が抱える、標準的に作られたパスを患者ごとに個別化し冊子として作り上げるのに必



要な、多量の事務業務だ。運用件数を伸ばすためには、外科医へのサポート体制を構築する必要がある。そのため、平成24年春から、肺がん、乳がん、肝がんを新たに加え、5大がんすべてで「がん地域連携パス」の運用を機に、院内の地域医療連携センターに一連の業務を集約し、連携パスを運用する際の共通システムを策定した。現在では、今まで外科医が行ってきたがん地域連携パスへの記入は、センター内の看護師や事務職員が担っている。

もう一つの問題は、患者の連携パスへの理解不足である。同センターの看護師長・古城敦子は、「当院を退院後も安心



して治療を受けることができることを、丁寧にご説明しています」と話す。遠くの基幹病院ではなく近くの医療機関で検査や診察が受けられる利便性や、2人の主治医に見守られる安心感などを、患者にも分かりやすい言葉で伝えるようにしているという。

地域で患者を見守る 理想のがん治療実現に向け 確かな手ごたえを実感。

がん地域連携パスで最も重要なのは、治療の質を一定水準に保つことだ。「送り出すからには、患者さんが連携先の医療機関できちんと経過を診てもらおうことがなにより大事です。現在のシステムは、連携先の医療機関へ患者さんが定期的に通院しているかの追跡調査を行うなど、今まで足りなかった部分を補ういいものが構築できたと感じています」と法水医師は話す。

古城看護師も、新システムの導入に手ごたえを感じている。「当センターでしっかりとご説明することで、最近では患者さんからの理解度も高まってきました。徐々に『がん地域連携パス』が浸透してきていると感じますね」。

がん地域連携パスの件数が増えれば、病院の外科医は手術を中心に、そして連携先の医療機関がその後の治療を担うという環境が構築されていくだろう。地域が手を携えてがんと向き合う理想のがん治療の実現に向け、名古屋第二赤十字病院の奮闘は今後も続いていく。

あしの健康教室

「あしのしびれ」について、参加者の疑問にお答えしました。

10月27日(土)、当院研修ホールで「あしの健康教室」を開催しました。テーマは「あしのしびれパート3」。「あしのしびれ」は以前にも取り上げましたが、地域の皆さまの関心が高く、今回第3弾として、参加者からの事前の疑問・質問に当院の整形外科チームが講演会形式でお答えしました。医師をはじめ整形外科領域に関わる多職種のスタッフが、自作の資料やスライドを使って分かりやすく講演しました。今後も、あしの病気やあしに影響が出る病気への正しい知識、予防医学を広めることで、地域の皆さまの「健康長寿」を支えていきたいと考えています。



ドラゴンズクリスマスショー

ドラゴンズ選手とふれ合う、夢と笑顔あふれるクリスマス。

12月20日(木)、毎年恒例のクリスマスコンサートを開催しました。第一部はフルートと弦楽器のアンサンブルによる演奏。普段の白衣姿から一変、クリスマスソングの演奏を披露しました。続いて第二部は、当院フラガール「アネラ」によるminiショー。陽気な音楽とダンスで会場を沸かせ、客席からは大きな拍手が起きました。そして最後はお待ちかね、中日ドラゴンズ選手とのふれあいトークショー。会場からはさまざまな質問が飛び交い、選手たちはその一つひとつに、丁寧に笑顔で答えてくれました。最後に、それぞれの選手から、会場に集まった患者さんやそのご家族、病院スタッフへ向けた温かなメッセージをいただき、クリスマスコンサートは終了しました。



国際医療救援活動

ハイチ

住民に健康管理の知識を伝える、「地域保健ボランティア」の育成などを手伝う。



2012年1月7日～10月10日までの約9カ月間、ハイチ大地震災害被災者支援事業へ当院から派遣した山之内千絵看護師が活動を終え帰国しました。まだ記憶に新しいハイチの大地震では、31万人の人が亡くなり、国民の3分の1にあたる370万人が被災しました。国際赤十字・赤新月社連盟(以下連盟)は地震発生後から継続して被災地の支援活動を続けています。ハイチでは、住民の暮らす町から医療機関まで片道1～2時間を要する地域も多くあります。西半球の最貧国のハイチでは、治療費や交通費を捻出できず、予防・治療すれば助かる病

気で命が失われています。山之内看護師は、草の根レベルで住民に健康管理の知識を伝えることのできる「地域保健ボランティア」の育成等を、ハイチ赤十字社、各国赤十字社のスタッフと行いました。帰国した山之内看護師は、「住民に保健管理の知識を伝える活動は大変なことも多くありましたが、現地で暮らす子どもたちの笑顔などを見ると頑張る気力が湧きました。活動を通して得た貴重な経験を看護師としての今後に活かしたい」と話しました。なお、現地の状況を鑑み、ハイチ大地震災害被災者支援事業は2014年12月ま

での延長が決まりました。また、11月1日には、フィリピン保健医療支援事業へ派遣されていた櫻井美弥子看護師が、オーロラ州ディサラグ郡から帰国。櫻井看護師は報告会で、6カ月の活動を振り返り「大変だったこと、楽しかったこと半々ですが、貴重な機会を与えていただいたことに感謝しています」と話しました。

派遣期間

ハイチ大地震災害被災者支援事業
2012年1月～10月
山之内 千絵(看護師)
フィリピン保健医療支援事業
2012年4月～10月
櫻井 美弥子(看護師)

編集後記 近江商人の根本「三方よし」

広報に例えるなら、読み手よし、作り手よし、世間よしとなります。何をすれば、患者さんや地域住民の皆様に喜んでいただけるか? これを追求しながら、今年一年、編集スタッフ一同がんばります。

■名古屋第二赤十字病院 企画課 メールアドレス kikaku@nagoya2.jrc.or.jp



日本赤十字社

名古屋第二赤十字病院

〒466-8650 名古屋市長和区妙見町2番地の9
企画課 TEL 052-832-1121 内線 51141 メールアドレス kikaku@nagoya2.jrc.or.jp